

## 〔資料〕

### 一 五年戦争末期の雑誌 (二)

——大日本雄弁会講談社刊『海軍』——

## 山 本 明

### I

一五年戦争の間でも、雑誌は興亡をくりかえした。日中全面戦争によって雑誌数はいちぢるしく増加し、一九四一年に統制と強制合併によって整理されたというものの、そうは簡単に整理されたわけではない。高崎隆治氏は次のようにその実体をのべている。

「戦前にくらべれば、種類や数量はきわめて少ない。けれども、二度三度と整理統合をくりかえしながら、そのすぐあとで続々と新たな雑誌が誕生するというなんとも不可思議な現象が、実は戦争末期の雑誌界の実態であったのだ」(高崎隆治『戦時下文学の周辺』一九八一年刊)。たしかに、そのとおりである。高崎氏は、各種団体の非売品の雑誌をふくめて言っているのだが、一般市販品でも「なんとも不可思議な現象」があったもので、たとえば、一九四四年五月に大日本雄弁会講談社から同時に創刊された『若

桜』と『海軍』についても、同じことが言える。この二誌は、「コードモエバナシ」と「幼年倶楽部」を廃刊にして代りに創刊されたもので、もっぱら、少年兵募集のための雑誌であった。

この創刊のいきさつを、当時の『海軍』編集長竹中保一氏はのちに次のように語っている。

「昭和一八年の一月五日、丸ノ内茶寮で『少年倶楽部』が、海軍省報道部の高戸大尉に話を聞きました。その際私も同席していたのですが、話のあとで、大尉から雑誌の用紙について、官給紙いわゆる㊦が相当あるので、これを講談社に回し、海軍の雑誌を出してみたいが、どうだろうという話がありました。

一二月十日になって、再び丸ノ内茶寮で、高戸大尉と加藤謙一氏と私が見えたとき、前述の官用紙の話が出ましたので、本社は、海軍の希望する雑誌を出したいものだと、申し出たわ

けです。

これより前、一方陸軍のほうからも、陸軍関係の雑誌を出したいからという話もあったのですが、陸軍のほうが決定的に前に、海軍のほうが先に決まったわけでした。ついで、陸軍のほうも話が進み、相前後して、決定したような順序です。海軍のほうは、高戸大尉のほか情報局の古橋海軍中佐も推進に当たりました。

雑誌名は初め海軍のほうが『若桜』が有望でしたが、陸軍のほうは、『若桜』と決まったので、それでは海軍のほうでは『海軍』と大きく出よう。しかし海軍の大看板名を誌名とすることについて多少、省内に異論があったようですが、そんなことをいつているときではない。全幅的に海軍が力を入れる雑誌として、しやにむに『海軍』に決まりました。

この雑誌は、募兵を中心に、海軍思想を青少年に普及させることが使命でしたが、あまりそれを露骨に表に出すと読んでもくれない。青少年たちが好んで読む普通の少年雑誌にし、その中に海軍記事を折り込み、海軍に憧れ、進んで軍人になりたくなくなるような気持を起こさせるものにしてほしいということでした。

二月一日に話が始まり、急遽編集案をまとめ、翌一九年一月五日に大綱が決定しました。『海軍』の編集長は今までの関係上私が、また陸軍の『若桜』も同じ募兵の少年雑誌として『少年倶楽部』編集長の岩本氏がそれぞれ指名され、四月二九

日天長節の日に創刊号が双方発売されました。」

『海軍』は、海軍の少年志願兵徴募のための雑誌である。少年志願兵とは、徴兵年齢以前の少年（一九四四年度では一四歳八カ月以上二二歳未満）が自発的に海軍に志願して検査と試験に合格した者のことを指す。兵種は水兵、少年飛行兵（乙種飛行予科練習生）、整備兵、少年水測兵、少年電信兵、機関兵、工作兵、軍楽兵、練習兵（特年兵）のほか、中学三年修了程度の甲種飛行予科練習生があり、さらに海軍兵学校・海軍経理学校予科（中学二年修了程度）があった。これは少年兵ではなく、海軍予科生徒と呼ばれた。少年兵は兵隊、予科練は下士官養成、海軍予科生徒は士官養成を目標としていた。

雑誌『海軍』の読者は、国民学校高等科の生徒と中等学校三、四年であつたらしい。投書欄にはこの少年たちの文章が圧倒的に多かった。ただ、私のような海軍ファンは国民学校初等科生徒でも読者であつた。発行部数は『講談社の歩んだ五十年・昭和編』（講談社、一九五九年刊）によると一九四五年一月号が十二万九〇部であつた。

甲種予科練の大量徴募がはじまつたのは一九四三年である。この時から、予科練の第一種制服は従来のセーラー服から、七つ鈕に変わった。甲種予科練が創設されたのは一九三八（昭和一三）年で、中学四年修了以上の少年を採用した。募集のときには「海軍航空隊の幹部養成」をうたつたから、海軍航空士官学校のつもり

## 一 五年戦争末期の雑誌 (一)

で応募したら、全くちがって、四等兵でセーラー服を着せられて、予科練二年ののち飛練に入隊し、そこを卒業して、ようやく下士官に任官するので、人気は低かった。しかし、大平洋戦争開始いらい、海軍航空隊の物的消耗ははげしかったし、とくに一九四二年六月のミッドウェイ海戦の敗戦で、海軍航空隊が致命的損害を被ったので、予科練の大量募集が緊急に必要とされ、中学生への募集が強化されたのである。この年の入隊者（一三期）は、前期一万九二名、後期一万六八六名であった。この募集にさいしては、県庁の学事課が中学校に人数の割当てをした地方もあり、島根県立米子中学や愛知県立愛知一中では、三年生以上の全生徒が受験することになった。<sup>(1)</sup>

ひきつづいて、一九四四年度も、大量の予科練習生入隊を必要としたのである。

雑誌『海軍』は、こうした背景の下に創刊されたのであった。

この雑誌の創刊を、私は朝日新聞一面の小さな広告でみた。疎開で西播の古い城下町の隣村に住みついたばかりの私は、さっそく町の新聞書店をさがして、『海軍』、『若桜』の両方の定期購読を申しこんだ。私は『海軍』だけでよかったのだが、当時は、もうインフレが進行していたから、一円で新雑誌を二冊読めばよろうと軽い気持ちで予約したのである。天長節の四月二十九日が土曜日で、三〇日の日曜日、私は来たばかりの城下町を「探検」するつもりで村の家を出て、二冊の雑誌をかかえて、立ち読みしたり、城跡の神社に行ったりして、半日をすごした。町に一軒ある

映画館では、「マライの虎」を上映していた。それは前年の六月に大都市で封切りされたもので、私は「いまごろ上映しているのか」と、「南の天地をまたにかけ、率いる部下は三千人」と主題歌をうたいながら、その映画館に行ってみたら、正面に太鼓の櫓がある古風な劇場で、なんと入口に下足があるのであった。私は映画はやめて、町を一望に見渡せる裏山の忠魂碑の横に腰を下ろして、まずは『海軍』のページをめくった。

創刊の辞をうつしておこう。

### 創刊のことば

「海軍」編輯局

尽忠報国の赤誠に燃え立つ青少年諸君よ。諸君が熱烈に待望してゐた新雑誌「海軍」は、ゆかりも深き海軍記念日を以て、いよいよ誕生したのである。この颯爽たる勇ましい姿を見給え。これが有史以来の大決戦下、世界各国が血みどろの戦争をしている最中に創刊されたのである。日本なればこそできることである。日本の底力を見よ。日本の偉さを見よ。この新雑誌「海軍」が戦う日本国の誇として、世界に押し出す日が、今こそ来たのだ。親愛なる青少年諸君よ。双手を挙げて万歳を唱えようではないか。

この新雑誌「海軍」は、すみからすみまで帝国海軍の方々の特別な御指導によってできる雑誌であります。であるからこの雑誌は、どこを読んでも、どの頁を開いても、帝国海軍の精神に光り輝いているのに、諸君も気づいたことではありません。

帝國海軍軍人たらんとする青少年にとつては、これ以上のために  
なる雑誌は無いはずだ。海軍少年兵たらんとする青少年諸君  
が、一日も手ばなすことのできな雑誌です。

親愛なる青少年諸君よ。この雑誌を毎月愛読して、りっぱな  
軍人になってくれたまえ。必勝不敗の帝國海軍は、諸君がこの  
雑誌によって心身を鍛え、一日も早く光榮ある軍艦旗の下に馳  
せ参ずる日の来るのを待ってゐるのだ。

われわれは、諸君と共に、このりっぱな雑誌を生んで下さつ  
た帝國海軍に心から感謝し、一人でも多くの青少年が、この雜  
誌を愛読せられんことを切に希望するものであります。

この雑誌を手にしたとき、私は落胆した。少年を海軍にこれが  
れさせるような読物は何もないのである。読物としては、吉川英  
治「海戦山軍」、岩田豊雄「海軍魂物語・九号水雷艇」では話が  
古すぎて、興奮するどころか、たいくつするだけであつた。これ  
は面白そうだと期待した大林清「ワシントン大爆撃」(高井貞二  
画)も、ページをめくって、航空母艦の絵を見たとなんに、モー  
ターボートみたいな艦橋の絵に失望した。冒頭の文章は次のとお  
り。「(大艦隊の)へさきのさすところ、〇〇キロの海をへだてて、  
敵首都ワシントンがある。これこそ、とおく故国の基地を發進し  
てから、決戦たけなはなソロモン諸島を右に見て、とちゅう敵補  
給路をおびやかし、ますます戦闘力を加へながら、南アメリカ南  
端ホーン岬の沖合はるかまわり、敵が夢にもおもわぬ大西洋進

攻をくだてた航空母艦、駆逐艦、巡洋艦からなる、日本海軍の  
大機動部隊であつた。太平洋のあらゆる方面に、敵のがむしや  
らな反抗をうけて、じつとそれを支えていた日本は、その間にひた  
すら蓄えた戦力で、敵を一挙に粉碎する大攻勢の時をむかえた。  
その皮切りが、この海軍機動部隊によって行はれる戦史空前の大  
遠征、アメリカ本土大西洋岸の大空襲である」。

航空母艦に搭載されている「新鋭陸載爆撃機」は、挿絵による  
と四発で、説明文によると、「今までの艦爆よりはるかに大型な  
のは、成層圏飛行のための発動機と、装甲の厚い気密室をもつて  
いるためだ」。

この爆撃隊が、ワシントンの官庁街、ニューヨーク附近の工業  
地帯を爆撃する。「白亜館」(ホワイトハウス)は自爆機で粉砕  
される。この仮空物語は、子どもを馬鹿にしたものであつた。ガ  
ダルカナル島から日本軍が「転進」したのは、一九四三年(昭和  
一八年)二月である。その年の五月にはアッツ島が「玉砕」し、  
一月にはマキン島、タラワ島玉砕と、敗戦は続いており、目ざ  
ましい戦果など、まったくなくなつていた。それどころか、一九  
四四年初頭から大都市市民の疎開がはじまり、私の一家もそそく  
さと地方の城下町に疎開したのである。つい三、四年前に「空襲  
何ぞ恐るべき、守る大空鉄の障」と歌ったのが、うそのように思  
えるのであつた。国内の物資は何もなくなり、疎開した私が手  
に入る遊び道具といえ、釣の道具一式(五円であつた)と魚をす  
くう大きな網、竹ヒゴで作る模型飛行機セットぐらいのものであ

## 一 五年戦争末期の雑誌(二)

った。国民学校の職員室の横の廊下には陸軍少年飛行兵の募集ポスターが貼られていた。

そういう時代に、ワシントン、ニューヨークの爆撃に機動艦隊が大西洋まで進撃するなんて、まともに考えることすら笑止千万であった。私は大林清という作家は、時代小説の作者だと思っていたから、(戦後になってから、現代小説も書いていることを知ったが)、この読物はミス・キャストだと立腹していた。

創刊号には、海軍が力を入れた記事として、海軍省人事局「甲種予科練志望者のために」と同「募兵問答・海軍兵志願者に答える」が掲載されている。

ところが、私は海軍少年兵に応募するつもりはなかった。自分をまだまだ子供だと思っていた。だから、私が欲していた軍艦の知識など一行も書いていないこの雑誌に落胆したのである。私が三年間愛読していた海軍雑誌『海と空』にくらべるまでもないほど、つまらぬものであった。

この雑誌を私が待ちこがれるようになるのは、八月号以降で、それも海野十三の連載小説「宇宙戦隊」だけであった。

(1) そのいきさつについては、米子中学については、高塚篤『予科練・甲十三期生——落日の栄光』(原書房、一九七二年刊)、愛知一中については、江藤千秋『積乱雲の彼方に——愛知一中予科練総決起事件の記録』(法政大学出版会、一九八一年刊)に詳しい。

## II

海野十三の戦時期の最後の小説は、「宇宙戦隊」である。いまに思えば、この小説は海野十三のもっとも得意とする宇宙SF小説である。そればかりか、現実の太平洋戦争も小説の設定に組みこまれていて、しかも、人類同士の戦争よりも宇宙戦争に目をむけるべきだという趣旨の小説だったから、一九四三年くらい大勝利のなくなった大東亜戦争にうんざりしている少国民の閉塞されているイメージを解放する役割をはたして、熱狂的に読まれたのであった。

私自身のことでは、少年時代の私は星や宇宙に大きな関心を持っていて、大阪の電気科学館のプラネタリウムを見るのが大好きだったし、愛読書の一冊に、石原純「世界の謎」があったほどで、天体望遠鏡が欲しくて、レンズのセットを買ったものの、鏡筒がうまく製作できずに、三枚のレンズだけ大切に持っていた。一九四〇年頃に、その頃各地に開館したニュース映画館でフランスSF映画「地球最後の日」を見て大興奮し、いつかの地球も破壊すると思うと、小学生の私が、虚無主義者になるのである。他方、一九四二年の日食の観察に、当時の新聞用語で言えば、「豆科学者」ぶりを発揮して、観察ノートを作製したりもした。

そういう私であったから、『海軍』に連載されている「宇宙戦隊」を熱狂的に読んだのである。

まず、「連載冒険科学小説」と銘打った「宇宙戦隊」の書き出しを紹介しよう。序章は「作者より読者の皆さんへ」とあって、次の文章が続く。

「この小説に出てくる物語は、今からだいぶん先のことだと思ってください。つまり未来小説であります。今から何年後のことであるか、それは皆さんの御想像にまかせます。しかしそれは百年も二百年も先のことではなく、あんぐわい近い未来に、このやうな事件がおこるのではないかと、私は考へています。それはそれとして、私たちは油断をしてはなりません。科学と技術とは、国防のために、また人類の幸福のために、新しい方面にむかって、どんどんきりひらいていかねばなりません。深い科学研究と、奇想天外な発明を一刻も早くつみあげていかないと、私たちも私たちの国も、とつぜんおそろしい危機をむかへなければならぬでしょう。」

今日の航空戦隊は、やがて『宇宙戦隊』の時代にかわっていくことでせう。数千メートルの高空を飛んで、敵機動部隊のま上にとびかかる航空戦隊、さらに成層圏を征服して、数時間で太平洋、大西洋を横ぎり、敵の首都に達し、大爆撃を行ふことになるはずの、明日の航空戦隊——それをもっともっと強くなりつぱなものにして、やがて『宇宙艦』をもつて、大宇宙を制圧するまでに進めなければなりません。(後略)

この格調高い前書きは、当時の私には、不思議な文章に思えた。当時の少国民むけの活字は、どれもこれも「米英撃滅」「撃てしまむ」「天皇陛下の御為に」などの紋切り型の文章がならんでいたから、「あんぐわい近い未来」に「宇宙戦隊」によって「大宇宙を制圧する」という未来小説は、私に現実を忘れさせたのである。私の現実とは、知らぬ村に住んで、坡下町の国民学校に通う毎日であったから、新しい環境に適応できなくて、不幸だと考えていた。小川には名もしらぬ青い魚が泳いでいたが、私の鰓には入ってくれなかったし、山には丸い玉のウサギの糞が沢山ころがっていて、ウサギは姿を見せなかったから、丸い玉の糞を木の突と思ひこんでポケットに入れて持ち帰ったりした。山も川も、私をつつみくんではくれなかった。

さて、「宇宙戦隊」の物語をすすめよう。

日本のある鉱山が五〇〇機の敵機によって爆撃され、完全に破壊された。その地底七〇〇メートルの坑道に、奇妙な死骸が発見された。全身が目のさめるような緑色の鎧でつまれていて、頭に三本の角が生え、目は大きな懐中時計ぐらいの大きさで厚いガラスのように光っていた。耳は大きなラッパ形で、口は大きく、口腔には歯がなかった。その怪物をかこんで、みんながさわいんでいると、本社研究所の理学士帆村莊六が、怪物は空から降ってきたこと、どんなことがあっても、地上へ運んではならないことを警告した。ところが、東京から有名な弁護

## 一 五年戦争末期の雑誌 (一)

士七人による特別刑事調査隊がやってきて、解剖のために地上の天幕に運び上げた。そこで怪物は生きかえり、コマのように廻って消えた。かけつけた帆村莊六は「あれは宇宙線を食って生きている奴にちがいない」と謎のような言葉をはいた。

他方、日根村で一人の男が、村道で前へ歩けなくなった。目に見えないが手でさわると、ぐにゃりとした柔かい壁があつて、前へ進めないのだ。三、四分でこの異変はおわつた。七人の博士は、村人たちの神経衰弱症のせいにしたが、帆村は宇宙戦争の開始を告げる重大事だと解釈した。帆村が緑色の怪物の死体のそばでひろつたネジは鑑定の結果、地球上の元素以外の元素を含んでいるものであることが判明した。

他方、村道のあの事件に遭遇した山岸中尉は真夜中に帆村に「航空隊に来てほしい。大事件が起きた」と告げ、帆村は自動車でかけつけると、龍造寺兵曹長たちが成層圏機で二万五〇〇〇メートルで不思議な報告を打電してきて連絡がたえたことを知らされる。その電文は「高度二万八千メートルニ達セシトロ、突然轟音トトモニハゲシキ震動ヲ受ケ、異状ニ突入セリ、噴射機関等ニマツタク異常ナキニモカカワラズ、速度計は零ヲ指シ、航器マタキカズ、ソレニ続キ高度計ノ指針ハ急ゲ自然ニ下リテ、ホトンド零ニ戻ル、気温ハ上昇シツツアリ、タダイマ外部ノ気圧計急ニ上昇ヲハジメ、早クモ五〇五……」。

帆村は兵曹長機が「魔の空間」に突入したのだとのべ、航空隊では臨時宇宙戦研究班を組織した。もちろん山岸中尉も帆村

莊六も班員である。まだ敵アメリカが屈服していないのに、宇宙戦とは何たることかという意見もあったが、大日本帝国が世界の安全を要する重大使命を有するかぎり、すすんで宇宙戦の準備をしなければならない責任があるという意見が勝ち、国外でも好評であつた。

五台の噴射艇が用意され、まず慧星一号艇二台が成層圏に突入した。高度三万八、〇〇〇米で、ノクトビジョン（暗黒の中で物の形を見る装置）にうつっている一号艇が雲に包まれていく。二号艇の山岸中尉、帆村莊六はなるすべがない。そして、二号艇も雲に包まれはじめた――。

ここまでは、五月号から一〇月号までのストーリーである。私がこの「宇宙戦隊」にうつつてゐる間に、日本はどんな敗色を濃くしていった。六月にはアメリカ軍がサイパン島に上陸し、むかえうった日本海軍は「敵機動艦隊に決定的打撃を与えず」と公表された。一〇月にはフィリピンのレイテ島にアメリカ軍が上陸。レイテこそ天王山だとさげられた。台湾沖航空戦でアメリカの航空母艦一隻を撃沈したというのに、またレイテに大艦隊が来襲するとは、どういうことなのだろうと、私は首をひねった。戦局は悪化するばかりで、八月には大都市の国民学校初等科四年以上の学童は集団疎開で地方に行った。私が三月に泣く泣く別れた神戸の国民学校の同級生は鳥取県の山村に行かされた。私がいいた城下町の寺にも、数十人の疎開学童が住んで、うかぬ顔

をして寺の本堂で爪をかんていた。

国民学校の校庭の半分がイモと陸稲の畠になり、中学生、女学生は三年以上が工場動員。二年生は学校工場、一年生だけが学校にいて、山で薪を作り、川原を開墾していた。私たち国民学校生徒は、いつもがらの生活を続けていた。さて、「宇宙戦隊」の続きを紹介しておこう。

二号艇の外には緑色の怪物が一四、五名やってきて、そのうちの一人、ココミミが日本語で帆村と話し、二人で出かけた。

残った者は機内で待機する。一〇時間後帆村は疲れはてて帰ってくる。帆村の報告では、ミミ族は生物といっても高等金属だ。「魔の空間」は内部にエンジンを備えていて、日根村に落ちたときには、中に沢山のミミ族がいたはずだ。それが人間の目に見えなかったのは高速で振動していたからだ。回転するプロペラがわれわれに見えないのと同じ理屈だ、と帆村は説明する。

帆足は龍造寺兵曹長を救い出し、二号艇が捕えられている魔の空間を爆破し、その亀裂に向って艇を突入させた。艇は外廓にひびが入ったが、ようやく地上に帰還した。

帆村はミミ族会見記を公表した。地球中が大きなわぎとなった。その頃、カナダのある町にミミ族の一隊があらわれて、住民ごと町を天空にひっさらっていった。同じような事件が世界中に起った。

その頃、帆村は、ミミ族を見る器械——電子ストロボ鏡の完

## 一 五年戦争末期の雑誌(二)

成に大害であった。ようやく大量生産が規道にのり、これを使うと「魔の空間」もその中の緑鬼もよく見えるのである。

三ヵ月後、帆村はミミ族狩りのための音響砲を開発した。超音波で周波数の高い震動を止める武器である。それで「魔の空間」を攻撃すると、見事、エンジンが停止したせいか、ゆっくり落下した。もう誰の目にも見える濃緑色と暗褐色のだんだんに塗られた西瓜のお化けのようなもので、大きさは二階建の国民学校一棟が案に入るほどであった。

帆村は中性子を利用したサイクロ銃で「魔の空間」の壁を切りさいた。中で緑鬼がさわいでいる。そこに龍造寺隊が突入して、緑鬼を捕え、かねて用意の宇宙線を遮蔽した檻にぶちこんだ。帆村は、ドリルや酸水素高温熔器や火花焼切器で、機械人体の解剖を進めた。中ががらん洞であることが分ると、帆足は高速の回転鋸でミミ族を唐竹割に縦に二分した。中に細い電線が網の目のように入りみだれて走っている。その中心に真赤なべらべらした硬い藻のようなものがあり、それを切り取ると、両手ですくいあげられる程の僅かな分量であった。

それを両手ですくいあげた所員は、急に悶絶した。彼の両手は大火傷し、骨はぐにやぐにやになっていった。帆村は語る。「この赤い藻のようなものがミミ族の正体だ。これは金属で地球上で一番重いウランよりも、もっと重い元素でできており、恐るべき放射能をもっているのだ。機械人体は、ミミ族の外套のようなものだ。彼らは地球へ遠征するのだから、地球人類に



## 一五年戦争末期の雑誌 (一)

会見するときもあらうと予期し、そのとき地球人類と同じような形をしていた方が都合がよいと考え、こんな外套を着こんで来たのさ」。

第一宇宙戦隊の噴射艇五〇〇隻は、「魔の空間」をぬって飛び廻った。と同時にミミ族に強硬な申し入れを行った。それは、第一慧星号を安全にこちらにもどすこと、次に、ミミ族は太陽系以外の空間に引きあげること、であった。五日以内にそれが行われないうときは、わが宇宙戦隊はミミ族にたいして自由行動をとると申しそえた。

回答のないままに、三日目あたりから、「魔の空間」の数は減じはじめ、五日目には一個を残すだけとなった。それは静かに降下しつづあった。下部には日章旗がぶら下っていた。着陸した「魔の空間」の中から、ミミ族に捕えられていた三人が出てきた。ミミ族が申し入れを全部聞き入れたことが分った。帆船は功を誇らず、安心の色もせず、こう言った。「彼らは、きつとふたたび地球に來襲するでしょう。次回は、これだけのものを持って行ったら必ず地球人類を制圧できるという自信のついたところで來寇するでしょう。さあ、みなさん、元氣を出して、誰も彼もが宇宙艇を操縦して、宇宙生活にたえるように勉強と訓練をしていただかねばなりません。さあ、蹶起して下さい」。

この最終回は『海軍』の一九四五年三月号に掲載された。それ

を私が読んだのは、二月末か三月初旬だったろうか。昼も夜もアメリカの戦闘機が空を飛ばない日はなく、味方機が要撃する姿は見たことがなかったし、夜はB二九の大編隊が頭上をすぎざるのを、息をこらして防空壕の中で待っていた。B二九は、灯火をつけて、ウーン、ウーンと爆音を共鳴させながら通りすぎた。国民学校初等科六年生は、真夜中であっても、空襲警報が発令されると、防空頭布をかぶって学校へかけつけねばならなかった。だが、することもなく、職員室のラジオで状況を知るか、サイパン島からのアメリカの謀略放送をきくほか、何もすることはなかった。

そんな時、校庭の楠の木の下で、そのころ増加してきた疎開仲間と、ひそひそこの町の悪口を言うか、知っているかぎりの戦況に関する情報を交換するか、少しまわっていた友人とクラスの女生徒の品定めをするか、そんなとき、「宇宙戦隊」のことを話する気にはなれなかった。私にしたら、久しぶりの本格科学小説(當時はSFとか空想科学小説という語はなかったのである)で、読んでいるときは満足していたのだが、現実には、頭の上を敵機が飛んでいるのであり、飛行機雲の美しさを、恐しさとのセットで見ることのない御時世なのである。宇宙戦隊どころではなかったのであった。

四月に(旧制)中学に入學して、五月はさっそく麦刈り、つづいて、グライダー練習場を開墾してイモ畑にする作業。単調な農作業だったから、私は手を動かしながら、「宇宙戦隊」のことを反芻していた。いまの日本は、物資が欠乏していて、しかも、せ

っかく生産した戦闘機も特攻に使用しているのに、宇宙用の噴射艇や宇宙戦隊など夢の夢だと悲観したりしていると、けっこう時間が経過するのである。

私は、この三月三十一日に停刊になった『少国民新聞』に連載されていた海野十三「火山島要塞」をおもいだしたりもした。この小説は、ソロモン群島あたりで日米両軍が血みどろの戦いを展開している。両軍とも、島に堅固な要塞を築いていて、どちらも難攻不落である。この連載小説が開始されたのが一九四三年末で、実際の戦局が日本にはかばかしく進展しなかったから、小説も日本を勝利させるわけにはゆかず、はじめは潜水艇や潜水航空母艦が登場したのに、末期ではだかの原住民を日本側に手なずける話が長々とでてきて、私たち読者を失望させた。

私は、毎朝、列をくんで登校していて、その集合場所の洋服店の店頭で『少国民新聞』を読んだ。その長男の同級生は、「火山島要塞は面白くなるはずはないぞ。サイパンも敵にとられたのに、ソロモン群島なんて戦争はすんでいる」と言いながら、それでも熱心に読んで、そのつまらなさに落胆して学校に出かけるのであった。その「火山島要塞」も、日本軍が米軍の要塞島の地下の火山脈を刺激して大噴火をおこすことで要塞を一拳に破壊するという結末であった。私たちは、「新聞が廃刊になるので、無理に日本を勝たせたな」とせせら笑った。海野十三は、こういうことでは、少年たちに軽侮される作家だったのである。

ところが、「宇宙戦隊」は、同じ時期に終わったのに、いつまで

も私の胸に残る作品であった。少くとも、中学生になった私が、単調な農作業の時間を、幻想的イメージで過ごすには絶好の材料であった。

いま考えると、一五年戦争の最後に出現したこの小説は、海野十三の作品としては最高傑作だったのである。

### III

さしあたり、創刊号から一九四五年五月、六月合併号の最終号までの全一四冊の目次を紹介しよう。これまで『海軍』についてふれた論文は全くないし、現物を閲読することも、きわめて困難で、いまでは一種の「幻の雑誌」となっている。したがって、目次の紹介だけでも、充分の意味があらう。

海軍	五月創刊号(海軍記念日特輯)九二ページ、五〇銭
表紙あこがれの予科練	寺内万治郎画
創刊を祝う	栗原海軍報道部長
想像絵 ワシントン大爆撃	高井 貞二画
(地図)決戦太平洋	中野 正治画
(写真)来れつづけ青少年 ゆけ空と海との決戦場へ	
(絵物語)あっぱれ日本魂柴崎中将	大木 雄二
(連載漫画)火の玉カンチャン	小川 哲男
聖訓五箇条(扉)	東郷 元帥
海軍記念日	大本営海軍
をむかえて 青少年諸君へ	報道部長 栗原悦蔵

一五年戦争末期の雑誌 (一)

ワシントン大爆撃……………大林 清

ロケット爆弾とはどんなものか……………海軍中佐 清水 洋

安保海軍大将に日本海海戦のお話を聞く

仰げ山本元帥……………海軍省嘱託 土屋 賢一

南太平洋 血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

敵艦艦轟沈・その他名案大募集

随筆 海戦山軍……………吉川 英治

海軍魂物語 九号水雷艇……………岩田 豊雄

海軍志願兵になるには……………海軍省人事局指導

甲種予科練志望者のために……………海軍省人事局

(募兵問答)海軍兵志願者に答える……………同

日本一・山の海軍村をすずねて……………清閑寺 健

冒険小説 宇宙戦隊……………海野 十三

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

海軍 六月号 八二ページ 五〇銭

勇ましい海軍青年士官 (表紙)……………宮本 三郎

われらの新聯合艦隊司令長官、海の精鋭を鍛える海兵団 (口絵写真)

火の玉カンチャン・航空決戦の巻 (連載漫画)……………横井福次郎

戦場の勇士につづけ……………海軍航空本部教育部長 上坂 香苗

葉隠の武人・古賀元帥……………海軍少将 下村 湖人

大東亜共栄圏の青空は僕らの空 (詩)……………三好 達治

南太平洋 血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

海国日本男子の歌……………黒岩 一郎

海戦の 僕は雷撃機だ……………海軍中佐 三井 謙二

島田水兵はがらか日記……………知多 譲

博多沖夜襲・十四歳河野通忠の初陣……………太田黒克彦

我が死所ブナにあり (陸戦の神安田部隊長)……………赤川 武助

よし僕らも行くぞ (武山海兵団見学記)

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

科学小説 宇宙 戦 隊……………海野 十三

海軍 七月号 八二ページ、五〇銭

儼たり帝国海軍の新鋭 (口絵写真)

海は諸君を待つ……………海軍中將 永村 清

母の愛に誓う若き海員魂……………森 健二

南太平洋血戦手記……………

血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

尽忠吉野山……………太田黒克彦

壮烈、陸戦の神・安田部隊長……………

我が死所ブナにあり……………赤川 武助

帝国海軍はなぜ強いのか……………

「出船の精神」を語る……………海軍少将 日暮 豊年

音楽で鍛える艦隊の耳、少年水測兵……………

海軍対潜学校見学記……………鹿島 孝二

水中聴音機と探信機の話……………海軍中佐 朝広 裕二

君はどの兵種を選ぶか	海軍省人事局
志願兵相談室	同
わが帝國海軍の諸学校	同
海軍志願兵試験問題の一例	同
科学小説 宇宙戦隊	海野 十三
豪快小説 南海の美少年	角田喜久雄
海軍 八月号 八二ページ、五〇銭	
(表紙) 少年水測兵	清水 良雄
(口絵写真) 決戦の太平洋を睨み闘魂を鍊る少年水兵	横井福次郎
(連載漫画) 火の玉カンチャン	山川伝之助
明治天皇御製虔講	文学博士 木村 莊十
太平洋を征服せよ(海軍航海学校見学記)	木村 莊十
あゝ鮮血のサイパン島	「海軍」編輯局
日本海軍の「五分前の精神」を語る	海軍少将 日暮 豊年
強いわけ	木村 毅
帝國海軍建設の父・勝海舟	影山 稔雄
予科練の游泳教育	海軍中佐 友近 頼義
科学兵器 測距儀の話	同
ここに艦隊	同
真珠湾攻撃秘話 ハワイに生きていた海鷲	山岡 莊八
志願兵受験の心得	海軍少佐 清水 秀政
志願兵相談室	海軍省人事局
試験問題の一例	同

一五年戦争末期の雑誌(二)

願書の書き方	少年飛行兵の適性検査
豪快小説 南海の美少年	角田喜久雄
科学小説 宇宙戦隊	海野 十三
少年武士道物語 越の白雪	太田黒克彦
南太平洋 決戦手記	血染めの軍艦旗 海軍主計大尉 山崎 淳一
海軍 九月号 (征空決戦号) 八二ページ、五〇銭	
出撃の少年飛行兵(表紙)	中沢 弘光画
第一線航空基地(口絵写真)	横井福次郎
火の玉カンチャン(二色連載漫画)	文学博士 山川伝之助
明治天皇御製虔講	海軍少将 日暮 豊年
宜候の精神を語る	井上 康文
決然立って奮戦すべし(詩)	報道班員 斎藤 信也
若鷲とマツチ	秋永 芳郎
聖將軍仲に雄飛を誓う(鹿児島航空隊見学記)	木村 毅
樺山資紀大将(名将物語)	大林 清
燃える整備傭	同
結索法(つな結び)の話	航空研究所 山本 峰雄
ロケット機の威力(航空科学)	特派記者 海軍省教育局
甲種子科練の身体検査場を見る	海軍省人事局
海軍予科生徒へ給進軍	同
志願兵相談室	同
甲種子科練の採用試験問題	同

一 五年戦争末期の雑誌 (一)

入団入隊の時は何を持参するか……………同

血戦手記 血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

歴史物語 元寇対馬血戦……………太田黒克彦

科学小説 宇宙戦隊……………海野 十三

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

海軍 一〇月号 一〇六ページ、五五銭

手旗信号と練習兵 (表紙)……………寺内万治郎画

雛鷺はかく鍛える (口絵写真)……………土門 拳撮影

火の玉カンチャン (二色連載漫画)……………横井福次郎

明治天皇御製虔講……………文学博士 山川伝之助

必勝の鎧はわが手にあり情報局情報官 海軍中佐 古橋才次郎

迅速・確実・静粛……………海軍少将 日暮 豊年

吉川少将の最期……………山岡 荘八

(勤皇志士)宮部鼎蔵……………望月 茂

誰にもできる航空体育……………土浦航空隊体育教官 遠山書一郎

(名将物語)西郷從道……………木村 毅

爆雷の威力 (科学兵器)……………海軍中佐 松枝 司蔵

志願と受検 海軍少年兵特輯 (海軍省人事局指導)……………

軍艦旗の下に集れ 志願兵の入る諸学校 海軍志願兵の進む道

誉はたかし海軍志願兵 検査の受け方 志願 兵 相談室

志願の手続 身体検査の受検心得 予科練の第二次検査

海軍志願兵志願書 学力試験と口頭試問 全校生徒予科練へ

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

科学小説 宇宙戦隊……………海野 十三

血戦手記 血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

海軍 十一月号 八二ページ、五〇銭

操舵訓練中の少年兵 (表紙)……………寺内万治郎画

決戦の神経をみがく少年電信兵 (口絵写真)

火の玉カンチャン (二色連載漫画)……………横井福次郎

明治天皇御製虔講……………文学博士 山川伝之助

国難に起つ少年志士……………岡 不可止

(名将物語)伊東祐亨……………木村 毅

荒鷲の道 (感激物語)……………赤川 武助

不言実行を語る……………海軍少将 日暮 豊年

航空戦と気象……………海軍中佐 岩本 喜一

真剣一路 (海軍通信学校見学記)……………神島 武夫

予科練から故郷への便り……………

甲種予科練の志願問答……………海軍省人事局

海軍志願兵の検査場を見る……………「海軍」特派記者

志願兵相談室……………海軍省人事局

(朝鮮・台湾)海軍特別志願兵検査の心得……………

血戦手記 血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

科学小説 宇宙戦隊……………海野 十三

海軍 一二月号 七四ページ、五〇銭

詔 書

戦闘配置につけ(表紙)……………寺内万治郎画

無敵の闘魂を鍊る少年掌砲兵(口絵写真)

火の玉カンチャン(二色連載漫画)……………横井福次郎

奮起せよ、神州男児……………元駐米大使海軍大將 野村吉三郎

見よ、かがやく大戦果

偵察員は空の艦長……………山岡 莊八

空母出撃……………報道班員 井上 康文

ああ神風特別攻撃隊(詩)……………報道班員 浅見 淵

必殺の先登体当り……………中野 晃

航空決戦と目……………海軍中佐 三重野 武

艦砲射撃の話……………海軍中尉 中島信次郎

純忠の神鷲につづけ……………海軍省人事局第三課長 伊藤 清六

志願兵相談室……………海軍省人事局

海軍へ進む近道

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

科学小説 宇宙戦隊……………海野 十三

血戦手記 血染めの軍艦旗……………海軍主計大尉 山崎 淳一

海軍 新年号 七八ページ、五〇銭

大元帥陛下の御尊影……………

明治天皇御製謹話(二色)……………文学博士 山川伝之助

一五年戦争末期の雑誌(二)

聖訓五箇条……………東郷元帥謹書

羽ばたく若鷯(表紙)……………寺内万治郎

敷島隊出撃の利那(口絵写真)……………

神鷲に誓わん……………大本営海軍報道部長海軍大佐 栗原 悦蔵

神風特別攻撃隊敷島隊……………山岡 莊八

負けず嫌いの関行男青年……………「海軍」特派記者 伊賀上 茂

親切でがんばりやの永峯肇少年……………旧 師 杉松 有義

神風特攻隊敷島隊を讀う(詩)……………蔵原伸二郎

電波探信儀の話……………海軍技師 西原 貢

(名將物語)東郷平八郎……………木村 毅

予科練入隊第一報……………「海軍」特派記者 神島 武夫

大空に雄飛せんとする諸君へ……………海軍省人事局 清水 秀政

志願兵相談室……………海軍中佐 海軍省人事局

新連載小説 怒……………山岡 莊八

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

科学小説 宇宙戦隊……………海野 十三

爆雷ドンチャン(連載漫画)……………横井福次郎

海軍 二月号 七四ページ、五〇銭

明治天皇御製謹話(二色)……………文学博士 山川伝之助

出 撃(表紙)……………寺内万治郎

武神に誓う若鷯魂(口絵写真)……………

神武の国に敵なし……………文学博士 中村 孝也

一五年戦争末期の雑誌(一)

神風特攻隊の勇士たち	報道班員	浅見	淵
大君の刃に	文部省図書監修官	中村	一良
おおぞら初陣(若鷲感激物語)	報道班員	多田	裕計
わが海軍新鋭戦闘機	航空研究所	山本	峰雄
鹿島海軍航空隊(見学記)	特派記者	後藤	楢根
海軍 予科生徒の採用試験場を見る	「海軍」特派記者	海軍省人事局	
志願兵相談室			
熱血小説 怒	濤	山岡	荘八
豪快小説 南海の美少年		角田喜久雄	
科学小説 宇宙戦 隊		海野	十三
爆雷ドンチャン(連載漫画)		横井福次郎	
海軍 三月号 七六ページ、五〇銭			
明治天皇御製謹話(二色)	文学博士	山川伝之助	
海戦必勝の耳少年電信兵(表紙)		寺内万治郎	
出撃奮迅する帝國海軍(口絵写真)			
清明の心	文部省図書監修官	中村	一良
B 29 墜王遠藤幸男大尉		赤川	武助
(軍神物語)広瀬武夫		木村	毅
海の肉弾・魚雷艇の話	海軍大佐	大宅	由耿
近代科学戦の華・少年電測兵(見学記)	「海軍」特派記者	後藤	楢根
昭和二十年度 徵募検査試験問題		海軍省人事局	

同 試験問題模範解答	同
志願兵相談室	同
第五回全日本少国民発明工夫製作品大募集	
科学小説 宇宙戦 隊	海野 十三
豪快小説 南海の美少年	角田喜久雄
熱血小説 怒 濤	山岡 荘八
爆雷ドンチャン(連載漫画)	横井福次郎
海軍 四月号 七六ページ、五〇銭	
海に拝する大御心(二色)	文学博士 山川伝之助
海軍予科生徒(表紙)	松野 一夫
海底にたぎる伝統魂(口絵写真)	
大決戦下に仰ぐ天長節	海軍中将子爵 小笠原長生
国難を救う若き力	海軍司政官 三増 英夫
大化のくさび	文部省図書監修官 中村 一良
この仇敵を討つは君たちだ(硫黄島防備の歌)	
日本独特の出血作戦	月光 渉
(軍神物語)佐久間 勉	木村 毅
高々度飛行と気密室	航空研究所技師 小林 喜通
佐久間精神につづく鉄鯨魂(見学記)	海軍特派記者影山 稔雄
少年水測兵の任務	海軍中佐 清水 秀政
海軍予科生徒受検突破記	東京都立六中 三合格者
昭和二十年度海軍兵・経理学校予科生徒採用試験問題	

海軍への近道 志願兵相談室

熱血小説 怒 濤……………山岡 莊八

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

少年士道記 ならぬ堪忍……………山本周五郎

爆雷ドンチャン(連載漫画)……………横井福次郎

海軍 五月六月合併号 六八ページ、五〇銭

明治天皇 御製講話 国民の赤誠敵を撃滅す……………文学博士 山川伝之助

新軍令部総長豊田副武大将(表紙)……………寺内万治郎

敵米軍艦載機

皇土決戦の陣頭に 鈴木貴太郎海軍大将……………木村 毅

立つ新総理大臣 必勝の鍵ここにあり……………大本営海軍報道部長 栗原 悦蔵

山本元帥につづく精神……………神島 武夫

(名将物語)秋山真之……………木村 毅

動く航空基地……………海軍技術中將 永村 清

忠 烈 遺 訓

輝く海軍志願兵……………海軍省人事局指導

海軍志願兵志願手続とその準備特許

志願書の書き方……………志 願 書 海軍諸学校と所在地

検査の種類と受け方……………志願兵の進道 身体検査の注意

学力試験と口頭試問の心構え……………志願兵相談室

豪快小説 南海の美少年……………角田喜久雄

少年士道記 友の為ではない……………山本周五郎

一五年戦争末期の雑誌(一)

爆雷ドンチャン(連載漫画)……………横井福次郎

#### IV

第二号の六月号には、海軍航空本部海軍中佐三井謙二「海戦の花形、僕は電撃機だ」という読物が掲載されている。雷撃機といえば、私は水上を低空で敵艦に接近して、魚雷をはなつもののだと思っていたが、この読物の末尾に、成層圏雷撃機のことによれられていて、私は一つ賢くなったと思った。その文章は

「諸君、どうだ。もし敵艦から全々わからない成層圏(約一万二千メートル以上の上空をいう)を魚雷をもって飛んで行って、急降下で敵を奇襲したとする——そしてあつというまにまた全速力で成層圏へのぼってしまふ。弾のように飛んできて、弾のように飛びさる。

さすがの敵米英もおどろくだろう。これでこそ思うとおり、敵大艦隊を撃滅することができるであろう。だが残念なことに、いまではまだ、あの重量のある魚雷を抱いて、僕たちは成層圏を飛ぶことができないのだ。一刻も早く成層圏雷撃機にまで、僕たちが昇格する日を望んでいるわけだ。僕たち雷撃機が、成層圏を群をなして飛ぶ、その自分の姿を想像するだけでも、痛快でたまらないのだ」。

この時代、成層圏を飛ぶ飛行機は、大きな夢であった。軍事的



観点では、そうした飛行機を先に開発した国が勝利するとまで言われていて、そうしたことは「少国民」もよく知っていた。そうした爆撃機を主題にした少年向き軍事SF小説もあった。当時の都会の「少国民」は少くとも大人よりも、軍事知識についてははるかに物識りであった。それは、少年は戦争が好きだというよりも、少年が関心を抱く科学知識は、軍事的なものしかなかったからである。天文学、鉄道模型、科学実験、そうしたものは、少年の身のまわりにはなかった。また、当時の国民学校の訓導は、精神主義者ばかりで、科学の楽しさを子どもに教えてくれる人にお目にかかったことがない。疎開前に親しくつきあっていたS君は顕微鏡を買ってもらったが、ときどき花粉をのぞくだけで宝の持ちぐされであった。科学にあこがれる少年たちを指導する人がなかったのである。私は仕方がないから、独習できる手風琴を持ち出して、疎開した農家の黒い門の敷居に腰かけて、熱心に自習した。やがて「故郷の廃家」や「スワニー河」が弾けるようになり、さらに楽譜なしで何でも弾けるようになった。だが、それ以上上達するための指導者もいず、やがて手風琴の空気がもればじめて押入れ行きになってしまった。疎開する前には、級友の兄貴たちが愛読していたという『子供の科学』を貸りて熱読したもののだが、その本の魅力の一端も『海軍』にはなかったのである。

『海軍』八月号で、私はようやく満足した。八月号の配本は七月中旬だった。その直前の七月七日、サイパン島が陥落し、日本軍は玉砕した。新聞で守備隊の陸海軍首脳部は「我等玉砕以て太

平洋の防波堤たらんとす」という電報で連絡がとれたことを知った。情勢は急激に悪化したようであった。来年私が進学するはずの中学校では、三年生以上に予科練入隊を半ば強制しているという噂が流れた。教師が家庭訪問して、入隊をすすめるのだそう、少し不良がかった生徒は、退学処分か予科練へ行くかと恐喝されたという。ただし、長男は無理して予科練に行く必要はないという噂で、長男の私はほっとした記憶がある。なぜ長男は優遇されるのかいくら考えても分らなかったし、国民学校の担任の教師に聞いても、明快な答えはなかった。

ところで、『海軍』八月号の記事に私は興奮した。それは、山岡荘八「真珠湾攻撃秘話、ハワイに生きていた海鷲」である。さしあたり、この読物を紹介しておこう。

ハワイ諸島の西南端ニーハオ島に、ハワイ生まれの二世の二家族が住んでいた。そこに日の丸を翼にえがいた戦闘機が不事着した。あわててかけつけると、操縦席に日本の飛行士が人事不省で倒れている。家にかついで帰ったら、気がついて、二世の原田氏に言った。

「ご主人ですか。ポケットに入っていた秘密書類がなくなりました。心当りはないでしょうか」。その書類は日系二世の妻が持っていた。ただし、彼女はその書類をアメリカ軍に売ろうとしていた。飛行士は原田と真夜中に家を出た。不事着した機体から機銃をはずして機体には火をつけた。二世の妻の家に放

火し、家ごと機密書類を焼いた。翌朝、カイイ島からやってきたアメリカ兵たちと戦って二人は壮烈な戦死をとげたのであった――。

この秘話を、『海軍』で読むまで、私は知らなかった。(2)新聞でも読んだ記憶はない。『海軍』のこの記事の冒頭には、『海軍省

にもたらされた現地の報告によって、山岡先生が熱血をそそいで執筆された特別読物」とあるが、いくらなんでも、戦時中にハワイの二世が海軍省に連絡できるはずもないし、これはおそらくアメリカの新聞か雑誌を中立国経由で入手した特種だろうと当時の私は想像した。それにしても、私は新聞や雑誌でこの記事を読んではいなかったもので、『海軍』を購読していたことをよろこんだ。九月号には、航空研究所山本峰雄の「高速を誇るロケット機の威力」という科学記事が掲載されている。

「今こそロケット機をりっぱに完成し、見事に使って、おごれる敵機動部隊にあつといわせてやろうではありませんか」とあるけれど、この当時から、私はこういう文章がきらいであった。「ロケット機をりっぱに完成する」のは大人の科学者であって、読者の少年ではない。こういう文章は空虚な空元気にすぎないものである。

一〇月号は「志願と受験、海軍少年兵特輯号」。全一〇六ページのうちの三〇ページが特輯ページである。その特集の巻頭をかざる激文を再録しておこう。当時の少年たちの指導者たちの雰囲気

## 一 五年戦争末期の雑誌(二)

が少しは分っていただろう。

海国日本の若き英雄たちよ

軍艦旗の下に集れ

騒ぐな、うろたえるな

敵機が、蝗の群のように空を蔽うても、敵弾が滝のように落ちて来ても、われに必勝の信念と、敵撃滅の新兵器とがある。この精神力と、この科学力とが、一つにむすびついているのみでない。皇国の海軍は、山の如くに動かず、林の如く静かに、隠してひかえている。

沈黙していても、その沈黙の威力だけで、すでに敵の度胆を寒からしめているんだ。況や、一たび、その沈黙を破るにおいては、痛打また痛打、米鬼のへろへろ軍艦なんぞは、忽ちぺしやんこだ。

ああ、この艦、この艇、この砲、この銃。みなこれ、陛下の艦、陛下の艇、陛下の砲、陛下の銃である。誰が搭乗し、誰が運転し、誰が操作し、誰が発射して、大御心にこたえ奉るのか。

「はい、私たちです。」

頼もしいかな、海の子等は。多くの先輩の後につづいて、わが海軍をめざしてかけつけてくる。学校から、農場から、工場から、漁村から、いたるところの職域から――。

「遅れるな、いま海軍にはいらねば戦争に間に合わぬぞ。」

## 一 五年戦争末期の雑誌 (二)

互いに合言葉をかかわして、続々と海軍入団、入隊の行進の列に加わってくる。このすばらしい勢を前にして、山骨は半肩をそびやかし、河声は雄叫びをあげ、草や木は紅葉して顔を赤めつつ、海の子の奮起をたたえている。

君も起て。

起って、この中に加われ。

加わって、仇敵撃滅の射手となれ。

かくして、「日本の男にうまれて来て、ああよかった。」という感激は、この時はじめて君の胸にわき起るであろう。

喧嘩過ぎての憐ちぎれは、何の役にもたね。

今。今。今だ――。

海軍は、双手をあげて、君の馳せ参じてくるのを待っている。

### 「海軍」編輯局

一九四五年一月、一五年戦争最後の年の幕が開いた。正月から空襲であった。新年号は、全ページあげて神風特別攻撃隊で埋められていた。精神主義が必勝につながるという趣旨ばかりである。それと海軍電波本部海軍技師西原貢「電波探信儀の話」が目をついた。まず、冒頭を引用しておこう。

最近敵アメリカ機は、しきりにわが国内地の爆撃をねらい、帝都上空や九州方面へ、たびたび侵入してきている。しかし、敵機が本土上空に近づく前に、わが防空陣はいち早くこれを発

見して、不敗の体制をととのえていることは、諸君もすでに知っているとおりである。また敵の潜水艦も、わが近海で、以前ほどは暴れまわらなくなった。それというのも、敵潜を見つける装置が、ひじょうに発達して、万全の準備をするようになったからである。

かように、敵機、敵潜が近づいてくるのを、いち早く発見できるようになったのは、じつに電波兵器が、最近すばらしく進歩し、完備してきたおかげである。この電波兵器を、帝国海軍では、二種類にわけていて、一つを電波探信儀、一つを電波探知機と呼んでいる。そのうち電波探信儀は、こちらから電波をだして、その電波が敵目的物にぶつかって、かえってくるまでの時間を測って距離を知り、あわせて目的物の方向や、高度を見るもので、電波探知機は、相手がだしている電波を受けとって、敵がどの方向にいるかを見つけるものである。

この文章では、日本軍も電波探知機を使っているようだが、私はその頃、見たことも聞いたこともなかった。大きなラッパがついた聴音機はおなじみだったが、電波兵器なんて知らなかったのである。

こういう科学記事では、日本の兵器をとりあげないのが通例であった。前回とりあげた『週刊少国民』には、さまざまな新兵器や戦車、軍艦が登場したが、どれも米英のものであって、日本の一度も掲載されたことはなかったのである。二月号の航空研究所

員山本峰雄「わが海軍新鋭戦闘機——世界に誇る『零戦』『雷電』『日光』」という記事で、久しぶりで我方の戦闘機が紹介された。しかし、これまでの経験から、軍が、「新鋭機」と言っても、たぶん三、四年前の機であろう。「隼」や「鍾馗」のことを考えると、日本の軍部はなぜ、戦意の高揚に水をかけるのだろうか、軍部の秘密主義をうらめしく思うのであった。

三月号に海軍大佐・海軍省嘱託大宅由耿「軍事知識・海の肉弾魚雷艇」の記事がでている。ここでも、イタリヤ、アメリカ、イギリスの魚雷艇のことが託しく紹介されているが、日本の魚雷艇については、次のように書かれているだけだ。「帝国海軍の魚雷艇は、他国とちがった考案の下に、日本人の国民性にあうようにつくられ、ペリリュー島沖における夜襲で、いっきょに敵輸送船四隻を屠ったのをはじめとし、いま各方面に活躍して、敵をさんざん悩ましているが……」。そこで紹介されている戦闘は、「敵は六〇トンから八〇トンの大型艇」とあるが、日本の魚雷艇は「日本人の国民性にあうようにつくられ」という文章の意味は、小型ということだと私は解釈した。しかも、この文章の末尾に「猛訓練によって神業のような戦果をあげ、新兵器を発明してこれを活用するのは、けっきょく人であり、精神力である」とあるから、どうやら、魚雷艇による特攻作戦のことを言っているのだなあと私は想像したのである。

(2) 真珠湾攻撃をめぐる秘話は三つある。一つは、「九軍神」

一五年戦争末期の雑誌(二)

の一人の酒巻中尉が「捕虜一号」になったこと。これは当時、「九軍神が五隻の特殊潜航艇に搭乗していたのでは数が合わない。士官一人が捕虜になったのだ」という噂は広く流布されていた。第二は、真珠湾で撃墜された日本機に宣伝ビラが搭載されていたこと。このビラの写真は、『一億人の昭和史・日本の戦史7・太平洋戦争I』に掲載されている。その写真には、爆撃されて沈みつづつある航空母艦とカリフォルニア型戦艦の稚拙な絵に You damned. Go to the devil. 聞ケノ 断末魔ノ声、馬鹿共限ヲ暈マセ と書かれている。これは、戦後はじめて明らかになった。第三番目が、ニーハオ島の日本人飛行士の事件。これについては、一九五三年になって、「二月八日」の真珠湾攻撃飛行部隊指揮官淵田美津雄中佐(当時)がニーハオ島を訪れて調査した。それによると、不時着したのは西開地一飛曹の零戦で、彼を助けたのは、日系米人原田義雄氏であったこと、西開地一飛曹はうばわれた書類を取り返そうとして原住民に殺され、原田氏は自殺したことが判明した。(奥宮正武『海軍特別攻撃隊——特攻と日本人』一九八二年、朝日ソノラマ刊による)。

## V

『海軍』の読者は、中学校三、四年が多かったらしい。それは、六月号からはじまる「愛読者だより」に、その年齢の少年が多いからである。このたよりには、『海軍』の読後感想文と自分の学

## 一 五年戦争末期の雑誌(二)

校の近況の二種類がある。六月号から、その二種類を引用しておこう。

『海軍』の創刊、お目度うございます。長い間待つて居ましたところ、表紙の絵も内容も実に堂々たるものです。小説も一流の先生ばかりで、ことに「宇宙戦隊」「九号水雷艇」「ワシントン大爆撃」など僕等の心がおどるものばかりです。(東京 都 新堀光次)

自分達の組では、去年の九月ごろから、毎日放課後、『海軍』創刊号に出ていた海軍兵学校の五省を唱えて、その日一日の学校生活を反省して居ります。

一人が前に出て、「氣をつけ」の号令をかけ、それから「一つ、至誠に悖るなかりしか」と、その者が唱える。一つ唱える、と、ほかの者は目をつぶったまま反省をする。五つ終ったら、「なおれ」の号令で目を開くのです。(東京電機第一工業第一本科四年丸肇)

七月号から「愛読者だより」は、「わが校の誇り」と名前が変る。七月号には、中学四年生と二年生の投稿が一つ一つ採用されているが、その一つを紹介しよう。

僕らの中学校では、学校を出ると直ぐに軍人となって、国につくすことの出来る人間を作るために、いろいろと錬成をやっ

ています。その主なものをあげると、水曜と土曜には全校生徒が、放課後五千メートルの長距離競争をします。また他の日には、武道、体操、銃剣術などをやって体を鍛えています。二講時の終りには、級長の号令で、各教室の前で、元氣よく乾布摩擦をやり、皮膚を強健にします。

登下校の際は、学区ごとに班長が指揮して二列縦隊で行進しますが、殊に下校のときには、全校生徒が集合して、次のような三省をやります。

一、修文鎮武の修養に悖るところなかりしか。

一、質実剛健の氣風に振勵せしか。

一、皇国民たるの錬成にそむくことなかりしか。

我ら常に負荷の大任を忘れず、誓って大御心に応へ奉らん。

鹿児島県立第一中学二年 城田尚幸

このほか、校門に、雨の日も最上級生が銃を構えて立哨している山口県立宇部中学の報告、学級の名前に「飛龍」、「利根」などの軍艦の名前がついているという静岡県掛川国民学校の報告。北海道庁立札幌夜間中学からの「われらの校訓」は「聖旨を奉体し、勇躍突破せよ、断じて息むことなかれ、われらは日本男子なり」だとの報告。

『海軍』六月号に、「諸君の行くべき道はこれだ・海軍志願兵の進路」(海軍人事局指導・「海軍」編輯局)と題する表が掲載されている。一五歳で海軍に入隊した場合の、コース別(一般兵、

乙種予科練、甲種予科練の進級表である。一般兵の場合は、一八歳で下士官、二二歳で准士官、二五歳で少尉に仕官する。乙種予科練は一七歳で下士官、二一歳で少尉、二四歳で大尉。甲種予科練では、一六歳で下士官、一八歳で准士官、二〇歳で少尉。

この種の進級表は、この雑誌に何度も掲載されている。その理由は、第一に海軍に入って「立身出世」をのぞむ者は少なかったにしても、軍隊であるからには、階級を度外視する者は少なかったこと、第二に、この雑誌には一切書かれていないけれど、海軍の志願兵も一種の就職であったから、階級はけっして無視できないものであったのである。一九四五年五月に乙種飛行予科練習生として高野山の航空隊に入隊した佐藤忠男氏は、次のように回顧している。「私の実感としての『予科練』（別冊一億人の昭和史・予科練）一九八一年、毎日新聞社刊所収」。

「貧しさゆえに進学できないで口惜しがっている優秀な少年たちのエネルギーを汲みあげ、それぞれの役所や企業の忠実な戦力として役立てる、傍流の進学コースが多様にあったのである。そして、そのひとつが陸海軍の少年兵だった。

以上のような各種のコースは、自ずからその将来性によってランクづけられており、その順位は時代によって変化しているしかし、だいたいにおいて、師範学校と予科練あるいは陸軍少年兵がそのトップのエリート・コースであったと言えるだろう。よく、七ツボタンに憧れて予科練に志願した、というような

## 一五年戦争末期の雑誌(一)

言い方がされるが、それはもう予科練も末期のことであり、私が行った最末期ともなると、もう、やたらと大量に採用したもので、試験もたいしたものではなかった。しかしそんな外見ばかり派手で実質はともなわない段階になっても、当時の私の氣持をふり返ってみると、愛国心というよりは、工員になるよりは有利な就職口だという意識がかなりあったと思う。

実際、戦争も末期となると、若い男は誰だって兵隊にとられ、誰だって危険な最前線に送られる可能性があつて、誰だって南海の孤島で餓死するおそれは大いにあったのだ。戦争が終わるなんてことは考えてもみなかったから、どうせ誰でもそうなのなら、鉄砲を担いで食うや食わずで歩きつづけたまき死ぬより、腹いっぱい食べて飛行機に乗って戦うほうがいいじゃないか、とか、勝利の日までうまく生きのびた場合でも、航空隊出身なら、なまじの工員などより、技術者としてもちゃんと食ってゆけるようになれるんじゃないか、とか、けっこう、それなりに計算したつもりだったのである。

いづれにせよ、私のころは、私のいた国民学校（小学校）高等科では、いくら何でも自信があれば、第一志望は予科練、第二志望は海軍工廠の工員養成所、どちらもダメなら地元の鉄工所の工員になるが、都会育ちだから満蒙開拓青少年義勇軍で満州へ行つて開拓をするだけはまっぴら、というあたりが一般的な気分だったものだ。

それでも、予科練も満蒙開拓青少年義勇軍も、そのころとも

## 一 五年戦争末期の雑誌 (二)

なると、もう学校に半ば強制的に志願者の割当てがきて、教師もそれを当然のことにように、平気で生徒に指名して志願させたものである。教え子を戦場へ送る苦悩なんてものは、当時の教師にはこれっぽっちも感じられはしなかった。

私の知人の何人かは、海兵、海経、予科練の出身者がいるけれど、そのうちの大半が一九四五年春の入校ないし入隊である。ただし、その中に『海軍』を読者を発見することはできなかった。

『海軍』を海軍に志願する前に読むことができた人は、一九四五年に入隊ないし入校者である。甲種予科練の入隊者(一六期)は、二万五〇三四名、乙種予科練(二四期)四万四九三一名、海軍予科生徒四、〇四八名、海軍経理学校予科生徒六〇一名である。そして、『海軍』の発行部数は、せいぜい一二万部だった。

右の佐藤忠男氏も書いているように、学校の教師が生徒を指名して、軍隊を受験させた。一九四三年度は、甲種予科練だけで、前期(一〇月一日入隊)一万九二名、後期(一二月一日入隊)一万六八九六名が採用されている。その前年が二、二八八名。二年前の一九四一年度が一二九六名とくらべると、一九四三年度が、ミッドウェイ海戦での搭乗員の激しい消耗におどろいた海軍当局が、大キャンペーンで、少年たちを募集したことが分る。一九四四年はマリアナ沖海戦で日本海軍は「決戦」に破れ、つづくフィリピン沖海戦で連合艦隊が壊滅し、とくに残る空母は実戦力を持たなかったから、予科練の少年たちにはなんの戦力にもならなかつ

た。佐藤氏の高野山航空隊では、「穴掘り」と「ふもとの農村の桑畑を芋畑に変えるため、桑の根っこを掘りおこす作業で農家を手伝っていた」という。佐藤氏は「ああいうことなら、なにも少年たちを軍隊になど集めなくても、郷里において農業なり工場なりで働かせておいたほうが役に立ったはずである」と書いている。たしかにその通りで、雑誌『海軍』は、結果としては「農家を手伝う」少年の労働力を軍隊の名で集めるのに、力をかしたにすぎなかったのであった。」

『海軍』四月号が配布されたのは、三月の末だったろうか。大都会は毎晩のようにB二九による空襲で爆撃されていた。私の住む城下町も、疎開者で人口は急増した。国民学校のクラス数は疎開児童で増加した。昨春秋は「レイテこそ天王山」といわれていたのに、いつの間にか「比島決戦」に変わった。かとおもうと、二月にマニラがアメリカ軍に占領されてしまった。『海軍』四月号に、「硫黄島防備の歌」が掲載される。この歌は「硫黄島守備隊勇士から募集し、去る二月十一日紀元の佳節に、一等当選歌として発表され、われわれにもたらされてきたものである。(中略)われわれは、この歌を単なる一篇の戦場歌とすることなく、戦う国民の熱血詩として、日夜愛誦するとともに、今こそ恨みかさなる驕敵を撃碎し、もってこの不滅の勲に応えねばならぬ」という前文つきであった。ただし、三月一七日に硫黄島守備隊は、二月一九日の米軍上陸らいい一カ月の戦闘の末、玉砕していた。歌詞は次のとおり。

(一)

太平洋の波の上／帝都の南千余キロ／浮かぶ渺たる一孤島／いま皇國の興廃を／決する要衝硫黃島

(二)

物量恃む敵國が／マリアナ侵し今すでに／大和島根に迫り来て／唯一線に残された／最後の特硫黃島

(六)

我等この地に在る限り／皇土は安し永遠に／日本男子の名を賭して／苦難に克ちて護り抜く／譽も高き硫黃島

この歌詞を読んだころ、私は中学の入学試験を受験していた。

試験当日、上空にはアメリカ軍の双胴の戦闘機が飛行雲をひきながら飛んでいた。右の歌詞に「物量恃む敵國が」とあるが、一九四三年頃から、アメリカの物量と日本の精神力という図式は、すべての新聞、雑誌に書かれていたけれど、すでに東京、大阪は空襲で災上しており、B二九だけでなく戦闘機が頭上で乱舞している、日本の防空戦闘機は一度も姿をみせなかったから、私は日本がいつか勝利するとは、とうてい思えなかった。私の近所の国鉄職員（保線係）は、「毎朝、少し早く出勤して、アメリカ製の工具を持っておくのだ。日本製とちがって、ドライバー一本でも、質がいいのだよ。工具が不良品だと怪我しやすいし、能率がちがう」というのをきいて、アメリカは「物量を恃む」だけでなく、質でも日本を凌駕していることを知って、絶望的な気持ちになった。

## 一 五年戦争末期の雑誌(二)

また、その「凌駕」にしても、アメリカの飛行機には、サイパン島や硫黃島と日本本土の海上で墜落したときの用意に、救命ゴムボート、食料、水、それに連絡用無電機が積まれていて、生還できるように用意されていると新聞には書かれていて、「命を惜しむヤンキー」と軽蔑した文章で日本の特攻隊と比較されていた。しかし、私は、養成に金と時間がかかるといふ航空兵がつぎつぎと特攻で戦死したらどうなるのだろうか、アメリカ式の方がいいように思えるのであった。

その少し前、国民学校の校長が朝早く、学校の裏山の忠魂碑に上級生数十名を参拜につれていったことがあった。最敬礼のあと、校長は生徒に質問した。

「昨日も今日も、そして毎日、特攻隊の勇士は出撃されています。勇士たちは、そのとき、何を考え、何を祈願されているのでしょうか」。

校長は、何人かの生徒を指名した。彼らは「はい、連合艦隊が出撃して、共同して敵艦隊をやっつけることです」とか、「もっとたくさんさんの飛行機で出撃することです」などととんちんかんの答えをして、校長を失望させた。正解は分っている。「体当たりする敵艦隊を発見することです」。私はあえて校長に答えなかった。残酷なことをあえて答えるほど、私は気が強くなかった。校長はいらだって、誰か答える者はいないか」とさいそくした。一人の成績のいい美少女が「はい」と手をあげて、正解を答え、校長にほめられた。私は、やさしそうな少女が残酷なことを平気で答え



## 一五年戦争末期の雑誌(二)

たことに、あれっと思った。いまでもその驚きと異和感を忘れることができない。その場の光景、校長の顔つき、すべてがストップ・モーションになって、いまでも私の頭に焼きついているのである。

## VI

『海軍』四月号の表紙は、海軍予科生徒の制服姿である。新設の予科生徒については、前年の九月号に記事がでていて、私は知っていた。その記事は「新しくひらけた諸君の突撃路・海軍予科生徒へ総進軍」というもので、中学三年から応募でき、将来、海軍兵学校、海軍機関学校、海軍経理学校に進むためには、この予科に入らなければならないことに制度が変わったのであった。

私は、四月で中学生になるばかりであったから、まだまだ先のことだと考え、他方では、本土決戦とさげばれているのに、三年後に海軍予科生徒になり、一年間の予科と三年間の兵学校生活の後に任官するなんて、当時の私のイメージからはみでていた。四月号の「海軍予科生徒受験突破記」を読むと、勤労働員で夜しか勉強できなかったが、「試験は教科書の問題そっくり」とあり、へえーと思った。

この四月号は、妙な編集で、私はとまどった。海軍予科生徒の記事にならんで、月光渉「本土決戦にしろめせ、日本独特の出血作戦」が掲載されている。武男という少年と叔父の問答である。

「武男 叔父さん、比島や硫黄島で、わが勇士が出血作戦に

よって、敵に大損害を与えたといいますが、その出血作戦とは、一たいどんなことなんですか。

叔父 そうだな。出血作戦というのは、世界に比類のない、わが国独特の日本的戦法なんだよ。おびたしい艦船、飛行機、銃砲、弾薬——いわゆるぼう大な物量をもって攻めてくる敵にたいして、もしまともからぶつつかって行くとすれば、敵に大損害を与えることはできても、こちらもまた相当の損害を蒙ることを覚悟しなければならない。そこで、こちらも相当の物量がある時なら、堂々と正面攻勢もとれるが、さもないければ、主力と主力との決戦は、できるだけ避けた方がいい。では、大きな物量をもつ敵にたいしては、ぜったいに勝負がないかというと、戦争というものは、決してそんなものじゃない。それには、敵の最弱点をつくとともに、こちらは独特な得意の戦法でぶつかって行くのが、一ばんいいんだよ。

武男 その敵の最弱点とは、なんですか。

叔父 それは、人間さ。米国が一日何百台の飛行機をつくると威張ったって、何千の兵隊・何万の人間を工場で一時につくりだすなんてことは、とても不可能だ。一億二千万の人口を有する敵アメリカは、そのうち女や老人、子供を除いて、約一千万人から千二百万人ぐらいしか戦線に動員できない。だから敵は、人間の損失をひどく恐れているんだ。それは、わが国を空襲する際、不時着機の乗員を救うために、いたるところに潜水艦を配置したり、搭乗員がみな落下傘や救命ボートを用意して

いるのをみても、わかることだ。また人命の損失があまり大きいと、国内が騒ぎだすので、自国軍の死傷者数は、実際の何分の一という、ごく少い数字で発表している有様だ。」

こうして「出血作戦」とは、「押せば斬り、退けば斬る所謂柔軟作戦」といおうか、わが国では昔から行なわれている巧みな戦術なのだ」と「叔父」は説明する。では、その「出血作戦」は、勝利とどう結びつくのか。「叔父」曰く。「長期の出血作戦こそ、物量を誇る敵にたいしては、最も有効な戦術なのだ。こうして敵が出血を繰返せば、敵兵は日本軍と戦うことが恐しくなる。出血が多くなれば、国内の不平が大きくなる。これこそ、敵撃波の近道であり、敵を圧倒する最もよい方法なのだ。この際われわれが、敵に勝つ手段として、これに勝るものはないといってよからう」。そして結論は、こうである。

「ことに敵は、わが本土に近づけば近づくほど、出血の量は大きくなり、補給は困難となる。出血作戦のねらいはここだ。敵がわが本土にくれば、反対にわが方は兵器も弾薬も兵隊も、思うようにいくらでも補給がつづけられる。遠く海をへだてて、補給のつづかぬ島島で戦うのとは違い、その時こそほんとうに一億一丸となって、真の日米決戦ができるのだ。それこそ、此方の思う壺さ。爆撃いかにはげしくとも、日本本土を蔽う鉄量は、全世界の鉄を集めても足りない。ましてや一億の軍隊を日

本に上陸させることは、なおさらできない相談だ。われわれ一億が特攻精神を発揮し、正成となり、正行となり、時宗ともなり、一人一殺、いや一人十殺、二十殺の覚悟で本土を守りさえすれば、どんな事態になろうとも、そこに勝利の大道は、たんとんとして開けて行くのだ。

武男 わかりました。僕らもその覚悟で、うんとかんぱります。」

どうやら、本土決戦も必至らしい。その時期に、海軍予科生院や予科練は何をするのだろうか。別の頁には、航空研究所技師小林喜造「高々度飛行と気密室」という記事で、一万メートル以上の成層圏を飛ぶことが重要で、「要するに、今日の決戦下に敵より千メートルでも上にあることは、軍事的に有利なわけだから、わが国にも成層圏飛行機の優秀なものが、一日も早くあらわれんことを、切に望んでやまない」と結論して、挿絵は、「前部、中部、後部と三箇所に気密室を備え、高々度飛行で本土に突襲するB二九」という雲上を飛ぶB二九の編隊の絵（山川惣治画）と、B二九の図解想像図がのっている。どうやら、日本の戦闘機は、高高度のB二九には立刀討ちできないらしいのである。

どう考えても、「出血作戦」と高々度を飛ぶB二九や飛行機雲をひいて飛ぶアメリカの戦闘機に、精神力や肉弾では勝てそうにない。私は、大いに不安であった。

中学に入学したら、さっそく陸軍幼年学校を受験して合格した

## 一五年戦争末期の雑誌 (一)

級友たちがいた。学業成績といっても、中学入学後二カ月後のことだから、どうやら国民学校の内申と身体検査が主であったようであった。私は、三、四年前に神戸で夏期休暇で帰宅した幼年学校の生徒を見て、海軍兵学校の白服にくらべてカーキ色の軍服に嫌悪感を持ってしまったものだから、あんなのにあこがれるのは、少し変った奴だと思っていた。

その頃、近所の大学予科の学生が徴兵で陸軍に入營していた。二等兵である。その彼が、休暇で帰ってきた。ところが、彼の隣家の同級生が私にささやくのである。「兵隊に行った××チャン、いま帰っているけど、兵營で毎日なぐられて、ひどいめにあうと言って泣いてる。もう兵營に帰らないと言うので、お母さんが、もらい泣きしながら、『そんなことしたら、監獄に入れられる』と言っていさめてるよ。予科練も、太い棒で尻をなぐるといふぞ。なるべく兵隊なんかに行かない方がいいようだ」。

だが、『海軍』には、予科練の記事が満載されていて、棒でなぐる話はでていない。それどころか、いいことばかり書かれていた。「予科練に入ると、しるこが食える」という噂で、いいなあという生徒もいた。

ところで、陸海軍のリンチについては、当時の私には信じ難いことであった。「うそだろう」と言ったら、前記の友人が、「予科練の教官も認めているぞ。この本に書いてある」と『翼の蔭』という本を貸してくれた。読んでみると、たしかに、リンチはあるようだった。本稿を書くために、図書館をさがしてみたら、あ

った。海軍少佐原田種寿述『翼の蔭——予科練教官の記録』（大日本雄弁会講談社・一九四四年二月刊、一〇、〇〇〇部発行）である。「大本営海軍報道部推薦」と中表紙に書かれていて、「序」を岩田豊雄が書いている。

その本の中に、小冊子「下士官教員服務参考」からの引用があり、こう書かれている。「制裁は禁物なり、制裁は不可なることは海軍全般のことなるも、いまなお裏面において、間々あることは残念である。しかもその多くが、なにゆえにかかる事柄を理由に、制裁せねばならぬか、了解に苦しむところのものであり、全く不都合千万なことである。制裁をせねば指導出来ぬという考えはあやまりであって、この考え方は、教員がその場、その場を安易に片づけようとするために生ずるものであり、大いにつしまねばならぬところである」。

どうやら、リンチはあるようだ。こんな一般向きの本にも書かれているのだから、軍隊ではごく普通のことなのだろうと当時の私は考えた。

当時の私は、書物に書かれていなければ、存在を疑うほどの活字信仰者であった。国民学校四年の時に、むかし二・二六事件が起ったことを知ったが、教師や親にきいても、はっきりとした返事がもらえない。ついに、神戸市立図書館に出かけたが、「児童は入室禁止」と言われ、「二・二六事件のことを知りたいのです」と言ったら、「大人になったら分るよ」と剣もほろろに追い返された。疎開したT町には、町立図書館があり、そのころには、新

聞には縮刷版があることを知っていたから、二・二六事件のことを縮刷版で調べようとしたら、老人の館長に、「古い新聞は大人にしか見せない」とここでも小馬鹿にされて、追い返された。

その二・二六事件について、『海軍』五・六月合併号に記事があったのである。木村毅「皇土決戦の陣頭に立つ新総理大臣鈴木貫太郎海軍大将」に、それがあった。

鈴木大将は大正十三年、一度は海軍将校みんなの最高の夢である、聯合艦隊司令長官に就任し、一年で軍令部長に転じた。(中略)昭和四年に軍令部長を退くと、待從長に任じられた。

この待從長昇任中二・二六事件がもち上った。青年将校たちがなにか誤解するところがあった、鈴木大将邸を襲撃したのだ。話しても納得せぬ。相手が掛ってくるなら、鈴木大将も軍人だから、のめのめ手を束ねて待つべきではない。陛下の御側近に

仕えている責任からも応戦せねばならぬ。それで愛刀を取りに次室に入ってゆこうと考えたのであるが、逃げる卑怯者と思われるのも心外であるから、また思い直して相手に立ち向かい、『撃て』と言った。ピストルの銃口は忽ちにして煙をふき、銃

丸は鈴木大将の肉身を鮮血に塗れさせて、その場にぱたりと倒れた。相手はそれに合掌してとどめを刺そうとしたので、その場に馳せつけた大将夫人が、「それだけは堪弁してください。鈴木とても海軍の軍人であります。もし強いて止めを刺すつもりなら、どうぞ私を殺してからにしてください」と倒れた夫を

身をもってかばうた。それで襲撃者は去っていったが、なんという奇蹟であろうか、弾は急所をはづれ、鈴木大将は再起せられたのである。山本五十六元帥は『皇天この至誠剛勇の忠臣を捨てず』と書いているのである。

この文章に私は大いに満足した。二・二六事件とは大変なことだったのだなと、ますます関心を高めた。その関心がある程度満たされたのは、戦後の昭和二〇年一月にいち早く刊行された森正茂著「旋風二十年」(寫書房刊)である。

ところで、この五月六月合併号が編集されていた五月から六月にかけて、沖縄での地上戦と特攻作戦が継続されていた。そして、六月二三日、沖縄は失陥し、航空機による特攻だけが闘われていた。そういう時期に、海軍技術中将永村清「空母の話・動く航空基地」が掲載されたのである。かつて「不沈の航空基地」といわれたサイパン島、硫黄島、そして沖縄までも陥落した時期に、航空母艦の記事では、どうもリアリティがないのである。

この五・六月合併号はいつ発行されたのか。残念ながら発行元の講談社には正確な記録がない。それに加えて、全国の運輸網が混乱している時期である。この五月・六月合併号を私が手にしたのは、敗戦直前だった記憶があるが不確かである。しかし、『若桜』五月六月合併号は八月二〇日頃入手して、「いまごろ来ても、読む気分にならないなあ」と思った記憶がある。それにたいして『海軍』の方は、沖縄陥落の後であったが、まだ終戦ではなかつ

## 一五年戦争末期の雑誌(一)

た。それでも、「動く航空基地」の最後の文章は、なにやら意味ありげで、私は「おやっ」と思った記憶がある。

今や戦局は、本土決戦に突入し、まさに皇国の興隆にかかる未曾有の重大段階に直面している。われわれは、なんとしても一台でも多くの飛行機を増産し、最後の最後までがんばり抜かなければならない。

こん後の日本を背負って立つ者は、いうまでもなく青少年であって、諸君の責務はきわめて重い。諸君はどの職場で敢闘するの結構だが、日本はもとと門辺海をめぐらす海軍国なのだ。青少年は進んで海へ征ってもらいたい。

飛行機の搭乗員となって、華々しい戦闘に加わるもよし、母艦の乗組員となって、操縦作業にあたるもよし、あるいは方面を変えてりっぱな軍艦を作りあげる技術、生産の職類に向かうもよし、皇国のため今こそ力の限り働いて、日本青少年の意気を示し、任務をりっぱに果していただきたい。(をばり)

ここでは「今や戦局は本土決戦に突入し」とあり、つづいて、「こん後の日本を背負って立つ者は、いうまでもなく青少年であって、諸君の責務はきわめて重い。諸君はどの職場で敢闘するの結構だが——」と、何が何やら訳が分からないのであった。もう、本土決戦に航空母艦なんか不要だ、そう考えているうちに、「新型」爆弾が広島、長崎に投下され、ソ連が参戦して、急速に

終戦になだれこんだのであった。

『海軍』は、五月六月合併号で、なんのあいさつもなく、廃刊になった。創刊号から、一五ヵ月目で、全部で一三冊を刊行して姿を消したのであった。

### 〔後記〕

雑誌『海軍』についてふれた文献は、これまで皆無である。そのため、本稿では資料紹介の部分が多くならざるを得なかった。しかし、私としては自分史的部分を附加することによって読者論構築の一助にするというもくろみもある。

なお、前回の「あとがき」で予告した『若桜』については、若干の号が入手ないし閲読できなかったので、後日にまわすことにした。

本稿の執筆にさいして使用した『海軍』の原本は、一九八二年初夏、山中恒氏の蔵書から割愛されたものを土台とした。一九四四年春から四五年夏にかけて私が本誌を読んでいた時期から三十数年ぶりにおもいがけず再会できたのは、山中氏の好意による。さらに欠号は、講談社の好意で閲読の機会を与えられた。記して感謝する。